



サファイアの心臓 -スカイヴェイル短編集-

【大空の支配者スカイヴェイル♡】

【未知の怪物にやられちゃう♡】

【オルガエンジン】シリーズ

生体ユニット・機械姦・快楽落ち・尊厳破壊

本格ディストピア戦闘メカアクション・ハードSF

著：XYZ L

未帰還機S-07

-漆黒の尾に貫かれて-



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系
ディストピア・ハードSF・メカ・バトルモノ
「オルガ・コード」シリーズ

著:XYZ_L

スカイヴェイル技術調査報告書:

ストームウイングS-07号機

被撃墜事案に関する予備調査

報告日: 聖暦2025年6月27日

発信元: スカイヴェイル技術開発部 オルガシステム研究課

宛先: スカイヴェイル軍事司令部、オルガパイロット育成局

1. 概要

聖暦2025年6月26日、鉄血連盟迎撃任務遂行中、スカイヴェイル所属ストームウイングS-07号機（パイロット: 識別コード【S-07】）が、未確認生命体「メテオ・ハーヴェスター」の攻撃を受け、被撃墜。パイロットは消息不明。

本報告書は、回収された機体残骸およびオルガシステム記録から得られた予備調査結果をまとめたものである。

特筆すべきは、ハーヴェスターの能力がオルガシステムとパイロットの生理機能に与えた前例のない影響である。

2. 事案発生状況と機体分析

S-07号機は、鉄血連盟の重火力部隊との交戦中に、突如として出現したメテオ・ハーヴェスター（斥候型、蹂躪型を確認）による攻撃を受けた。回収された機体残骸からは以下の点が判明した。

装甲損傷: 機体前面およびコックピット周辺のアノガラス装甲に、ハーヴェスターの爪と牙による重度の腐食および破砕痕を確認。防御システムの瞬時の低下が推測される。

オルガエンジン停止: メインオルガエンジンは致命的な損傷を受け、完全に機能停止。しかし、誘爆の痕跡はなく、外部からの物理的破壊ではなく、内部からの制御喪失が主因と見られる。

コックピット内の状況: パイロット搭乗区画は激しく損壊。強化スーツは広範囲に裂け、特に下半身に集中。内部構造材には、ハーヴェスターの尾部と思われる有機金属の付着物が確認された。

3. オルガシステム記録および生体データ解析

S-07号機に搭載されていたオルガデバイス(S-07B)およびパイロット識別用マイクロチップ(S-07C)から、被撃墜直前までの極めて詳細な生体データおよびシステム記録の抽出に成功した。解析結果は以下の通りである。

3.1. フェロモンによる生理機能への影響

性感の異常な高進: ハーヴェスター接近と同時に、パイロットの性感レベルが通常時の**250%**以上に急上昇。

これは、ハーヴェスターが放出する「流星の瘴気」に含まれるフェロモンが、機体のNSO(ナノセーフティ・オーバーライド)による精神保護バリアを透過し、人間の脳波および神経伝達物質に直接干渉した結果と推定される。

強制絶頂誘発: フェロモン曝露後、オルガデバイスの振動パターンが異常な高周波数(約90回/秒)に移行。パイロットの脳波が絶頂時のパターンに固定され、システム記録には短時間に連続した複数の絶頂反応が示されている。これは、パイロットの意思とは無関係に身体が極限の快感状態に強制されたことを意味する。

制御系の逸脱: 絶頂時のオルガシステムは理論上最大出力を発揮するものの、同時に制御の隙が生じる。本件では、この絶頂状態が継続的に強制されたことにより、パイロットによる機体制御が完全に機能しなくなった。オルガエンジンの出力はピークを維持しながらも、機動系への指令は途絶していた。

3.2. 尾部侵入による肉体的蹂躪と子宮への影響

腔内侵入の確認: オルガデバイスの記録は、既に挿入されていたデバイスに対し、外部から別の異物(ハーヴェスターの尾部突起と推定)が強制的に腔内へ侵入したことを明確に示している。デバイスは、その異物によってさらに深部へと押し込まれた痕跡がある。

子宮への直接刺激: 侵入した尾部突起は、デバイスを介しながらも、パイロットの子宮に直接的な刺激を与え続けたことが生体データから読み取れる。子宮の痙攣反応が異常な頻度で記録されており、これは身体が極度の性的刺激によって限界を超え、生殖器全体が「蹂躪」された状態を示唆する。

肉体機能への深刻な懸念: 長時間にわたる極限の性的快感と物理的刺激は、パイロットの生殖器系に回復不能な損傷を与えた可能性が高い。ホルモンバランスの崩壊、子宮および卵巣の機能不全、さらには全身の肉体的な疲弊と消耗が推測される。

3.3. 精神的屈辱と戦闘力への影響

生体データの全漏洩: パイロット識別用マイクロチップは、フェロモンとナノ振動の干渉を受け、心拍、脳波、そして性的な反応(喘ぎ声を含む)の全てを、暗号化されずに機体通信網および連携ドローンに常時送信していたことが判明。

屈辱による精神的崩壊: このデータ漏洩は、パイロットが自身の最も私的で無防備な状態が、味方や司令部、そして一般兵士の目に晒されているという極度の屈辱感を誘発したと結論付けられる。この精神的負荷が、すでに強制された快感による理性の麻痺と相まって、パイロットの抵抗する意思を完全に奪い、戦闘継続を不可能にした。オルガニズムによる肉体と精神の一体化が、皮肉にも最大の弱点として露呈した形である。

4. 考察と今後の対策

今回の事案は、メテオ・ハーヴェスターがオルガシステムおよびオルガパイロットに対して、エコーズとは異なる、より直接的かつ獣性的な「蹂躪」を行う能力を持つことを明確に示した。特に、フェロモンによる生理機能の乗っ取りと、強制的かつ継続的な性的刺激は、パイロットの肉体と精神を同時に破壊する極めて危険な戦術である。

今後の対策として、以下の点を緊急に検討する必要がある。

ハーヴェスター対策特化型オルガデバイスの開発: フェロモンやナノ振動を遮断・無効化する機能、および外部からの強制侵入に耐えうる物理的防御機構を備えたオルガデバイスの設計。併せて、NSOの耐干渉アルゴリズムの抜本的なアップデートを急務とする。

パイロット精神防護プログラムの確立: 極度の性的屈辱や強制絶頂に耐えうる、あるいはそれらを克服するための精神訓練および心理カウンセリングの導入。

オルガシステム緊急停止プロトコルの見直し: パイロットの生体反応が危険域に達した場合、強制的にオルガシステムを停止させ、機体からパイロットを緊急排出するシステムの開発。

マイクロチップのセキュリティ強化: 生体データの不意な漏洩を防ぐための暗号化プロトコルの強化および、危険時にデータ送信を遮断する機能の実装。

この事案は、スカイヴェイルのオルガパイロット運用における最も深刻な脆弱性を露呈させた。早急な対策を講じなければ、同様の悲劇が再発し、オルガパイロット全体の士気および戦力維持に壊滅的な影響を及ぼすだろう。

未帰還機S-07 ―漆黒の尾に貫かれて―

1. 蒼き獵犬の飛翔

高度5,000mの空域。

眼下に広がる分厚い雲海の隙間から、地上の黒煙と無数の爆発が紅蓮の華を咲かせているのが見える。

スカイヴェイルの精鋭部隊に所属する私は、主力量産型オルガマシン『SV-601 ストームウィング』を駆り、戦火の空を縫うように飛翔していた。

機体表面を覆うサファイアブルーのナノガラス装甲が、赤き閃光を反射して美しく発光する。

高機動戦に特化したこの機体のコックピットは、ライディング方式を採用していた。

私はコンソールにバイクのように跨り、強い前傾姿勢で操縦桿を握り込んでいる。

ストームウィングが空を裂き、9Gを超える急旋回を放つ。

本来ならばブラックアウトを引き起こす致死的な重力加速度が、私の体重のすべてを股間の鞍へと激しく叩きつける。

鞍の内部から伸びる12センチを超える硬質なナノ突起。

強烈な遠心力によって膣の最奥、子宮口へと容赦なく押し込まれたそれは、オルガエンジンの脈動に合わせて生々しく震えていた。

「ひうっ……！」

肉体が悲鳴を上げるほどの苦痛とストレスは、精神保護防壁『NSO』によって瞬時に強制的な快楽へと変換（オーバーライド）されていく。

「あ、んんっ……システム、オールグリーン。オルガ・シンクロ率、85%を維持」

激しいドッグファイトの機動は、柔粘膜を抉る物理的な快楽となって私の脳髓を直撃する。

引き換えに、絶頂の波から生み出される性的興奮は、機体の圧倒的な反応速度へと変換される。

普段は機体との一体感を高めるこの精妙な振動が、今は私の意志そのものだ。

青く輝くコックピットという名の絶望の密室。

私は汗と愛液にまみれながら、仮想空間に表示される敵影を追った。

視界の先で、鉄血連盟の重装観測機『IBF-D01 ヴォロン』が不気味に滞空している。

地上の重火力部隊へ弾道データを送るための、忌まわしい空の目だ。

「あの鉄塊……。落としても落としても、次から次へと」

ヴォロンは高度な自律回避プログラムを持たない。

厚い装甲板と力任せのスラスターで、被弾を前提に空中に居座り続ける「空飛ぶ鉄塊」だ。

私の放つレーザーガトリングの光条が、ヴォロンの無骨な機体を焼く。

装甲が赤熱し火花を散らしながらも、黒烏は執拗にこちらを見据え続けていた。

その鈍重な存在感に苛立ち、私はスロットルを一段階押し込む。

直後、股間のデバイスが咆哮を上げた。

高周波振動が子宮口を激しく叩き、内側から強制的に熱を絞り出される。

「あっ、んんっ……！ 奥っ、叩かないで……ッ！ 出力、安定……！」

子宮を抉る強烈な快感に、思わず卑猥な喘ぎ声が漏れる。

内腿を伝う愛液が、耐熱スーツの内部をじわじわと濡らしていく。

快楽を代償に得た機動性は、ストームウィングを戦域の支配者へと変えた。

私はヴォロンの包囲網を紙一重の機動で潜り抜け、連携ドローンと共に敵機を次々と撃破していく。

オルガシステムが私の絶頂をエネルギーに変換し、機体は生命体のようなしなやかさで蒼穹を舞った。

右翼を展開していた僚機（ウィングマン）から、戦術通信が入る。

『こちらS-08。右翼のクリアを確認』

「了解（コピー）っ、ああんっ。私のドローン群も、左翼を制圧したわ.....」

強がる声の裏で、抑えきれない甘い吐息が通信に乗る。

「敵影、残り3.....。これで終わりにするわ」

そう呟き、トリガーに指をかけた瞬間だった。

空が、一瞬にして異質な輝きを放った。

2. 流星の襲来と防壁崩壊

『——警告。右舷上方より未確認の質量体接近。熱源反応、ゼロ』

機械的な警告音声が響いた直後だった。

空が、一瞬にして異質な輝きを放った。

雲海を突き破り、巨大な隕石のような塊が音速を超えて落下してくる。

大気との摩擦熱を持たない、銀黒に鈍く光るいびつな岩塊だった。

「防空ミサイルなの！？ 総員、回避——」

右翼を展開していた僚機が叫んだ瞬間、その岩塊が空中で内側から弾け飛んだ。

炸裂した岩殻の中から現れたのは、ミサイルでもドローンでもない。

銀黒の装甲、鋭利な爪と牙。

猛禽類と竜が醜く融合したような正体不明の異形が、レーダーの予測限界を超える異常な機動力で編隊の懐へと突っ込んできたのだ。

「何.....あれ.....！？」

通信網を悲鳴が切り裂く中、私のストームウィングにも強烈な物理的衝撃が走った。

「きゃあぁっ.....！」

慣性制御システムが悲鳴を上げ、機体がスピンする。

回避運動を取る間もなく、私はまるで捕食される獲物のように奴の巨大な影に捉えられていた。

機動性を極限まで高めた代償として、物理的な防御力そのものは低い。

頼みの綱であるナノガラス装甲が、異形の爪から滴る強酸性の粘液と接触し、激しい化学反応を起こして有毒な白煙を上げる。

ドロドロに溶解した装甲が、いとも容易く引き裂かれた。

飛び散る火花。

コックピット内に『気密低下（ディコンプレッション）』のマスターアラームがけたたましく鳴り響き、焦げ付いた回路の異臭とオゾンの匂いが充満する。

その瞬間、裂けた装甲の隙間から、肌を這い上がるような強烈な悪寒が全身を駆け巡った。

まとわりつくような、ねっとりとした銀黒の霧。

この未知の化け物が撒き散らす、発情を促す異常な瘴気（フェロモン）だ。

急減圧によってコックピット内に流れ込んだ致死的な霧を、私は無防備に肺の奥底まで吸い込んでしまう。

『——エラー。生体ネットワークへの致命的な干渉を確認。NSO、強制シャットダウンを実行します』

スカイヴェイルが誇る精神保護システム『NSO』が、警告を鳴らす間もなく薄紙のように食い破られ、完全に沈黙した。

それは単なる死の恐怖ではない。

防壁のシステムが崩壊した反動と、直接吸い込んだ未知のフェロモンによる生体ハッキング。

その相乗効果によって、安全装置によって抑え込まれていた私の性感は、通常時の250%以上へと一気に跳ね上がった。

装甲を大きく欠損したストームウィングは空力バランスを完全に喪失し、きりもみ状態で雲海へと落下していく。

高度計の数値が、5000、4000と恐ろしい速度で減少していくのが見えた。

（機体の姿勢を……立て直さないと……っ！）

私は必死に操縦桿を引き絞ろうとする。

だが、腕に力が入らない。

常に膣の奥で脈動していたオルガデバイスの微細な振動。

それが、過敏になりすぎた柔粘膜にとって、一瞬で脳髓を焼く暴力的な快感へと反転したのだ。

「あ、あっ……ひいっ！？ や、だ……おなかの奥、熱いっ……！」

溶けた装甲の隙間から、容赦なく暴風が吹き込んでくる。

致命的な機体損傷。

墜落の危機。

精鋭パイロットとしての理性が、緊急プロトコルの実行を命じている。

スロットルを開き、姿勢制御スラスタを再点火しなければならない。

「スラスター……再起、動……っ！ ああっ、んんっ……！」

音声コマンドを発しようとした唇から、甘く卑猥な喘ぎ声が漏れた。

システムは私の声を「指示」ではなく「絶頂のノイズ」として処理し、エラーを弾き出す。

高周波振動が子宮口を激しく乱打するたび、脳内麻薬が致死量を超えて分泌される。

操縦桿を握る手が震え、指先が滑り落ちる。

「だめっ、落ちる.....機体が、落ち.....ひやぁあっ!？」

立て直さなければならないのに。

私の肉体は、死の恐怖よりも、腹の底から突き上げてくる発情のエラーコードを優先していた。

コンソールに突っ伏したまま、意思とは無関係に、私の腰がサドルへと激しく打ち付けられる。

機体の制御を完全に失い墜落していく中、私の視界の端で、あの未知の化け物の「銀黒い尾」が、裂けた装甲の隙間からコックピット内へとぬるりと這い入ってくるのが見えた。

機体設定

SV-601 ストームウィング



管轄: スカイヴェイル軍事司令部 / 技術開発部

分類: 主力・量産型 高機動オルガマシン

1. 機体概要

スカイヴェイルが掲げる「空の支配と絶対的自由」を体現した、量産型の人型航空戦力。

巨大な都市を空中に浮遊させる同陣営において、都市防空の「盾」であり、地上の脅威を払いのける「猟犬」として配備されている。

単座機でありながら、高度なナノテクノロジーと無人ドローンのスウォーム(群れ)連携を駆使することで、他陣営の重装甲機を寄せ付けない圧倒的な空間支配能力を誇る。

作品名: 未帰還機S-07-漆黒の尾に貫かれて-

発行日: 2026年5月10日

発行者: XYZ_L

連絡先: <https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード(SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む)を固く禁じます。
